

■ 書 評



精神医学の实在と虚構

村井俊哉 著
日本評論社
2014年3月 232頁
本体価格 2,400円+税

これからの精神医学のあり方に関する提言として興味深い論考集であるとともに、精神科医を勇気づけ、能動的な関わりを求める思想書でもある。6章で構成されるが、何れも、過去に発表された独立した自著論文からの引用に現時点での主張や回想を自ら加えるという異色の構成となっている。発表当時の各論文の主題は異なるが、本書では、「精神医学にとっての『本質』とは何か?」という一見重い疑問が全体を貫く主題として展開される。意識的に考えることなく、「もっと本質的なものがあるに違いない」という精神科医が抱き易いナイーブな思い込みの危うさが建設的に批判されている。代わりに、『本質』論にまつわる限界をわきまえながら、真理の探究や価値の顕在化という問題に対する答えを、無造作な直感に頼らず、徹底的に意識的な知的作業を通じて求めている。このように能動的な姿勢が全編を通じて強調されている。

内容の一部を紹介しよう。第1章では『本質』論を考える契機となった問題が、カプグラ症候群で生じる対象への疑念にあったことが明かされる。固有名詞が指定する個の同一性が主題で、「記述の特徴は個の同一性を決定しない」という哲学者の主張が援用される。必然的に個の同一性の決定には定義困難な何かを仮定せざるをえなくなるが、著者はとりあえずそれを個の『本質』と呼ぼうと相対化し、自明な『本質』の存在を否定する。以降、主題の対象は広がり、第2章では、「目に見える症状の背後に病気の本質がある」と疾患名を固有名詞的に用いる従来診断と、「観察可能なクライテリアに還元する」理念で疾患名を非固有名詞的に扱う操作的診断基準との視座の違いが強調

される。第3章では、「『統合失調症とは〇〇という病気である』というように、シンプルな心理学的概念やワンフレーズの哲学的概念では語ることが出来ない」と著者の考えが端的に現れている。第4章では精神医療に対する精神科医の姿勢について、精神科医ガミーの言説を援用しながら、生物-心理-社会モデルが無造作、盲目的に主張される場合を折衷主義と批判する一方、同じく複数の方法を組み合わせるにしても、単なる並置ではなく、「今、ここで」最適な方法を決定、選択するストイックな多元主義を推奨する。また、日常臨床では自然科学的方法のみで患者を理解することは難しく、ヤスパースの「了解」が採るべき方法として提唱される。第6章では、精神医療における価値の問題を扱い、日常診療でも精神科医が自分なりの価値判断の意思決定を行う必要性が強調されている。

第1章では哲学からの引用や議論の包括性のため、飛躍やフォローしづらい部分が散見されるが、本書全体としては、抑制が効き、時に意表を突く話題を交えながら説得力のある論考を積み重ねている。また、特定の立場に固執せず、全体を俯瞰した著者のメッセージが肯定的に発せられており、不毛な反発を起こさずに読者を精神医学の『真理』や『価値』にまつわる省察に導くことに成功している。評者は、『本質』は先験的に存在するという曖昧な直観を排し、自らの限界を知りながら『本質』を築こうと呼び掛ける著者のメッセージに素直な共感を覚えた。さらに、第5章で、医師-患者間での一度きりの作業である「了解」を伝達可能なものに発展させることの重要性が指摘されている点も興味深い。若手に「了解」を説明することの困難を評者自身が感じており、殊更である。「日々の臨床に直結しそうなない」テーマという著者の予想は見事に肯定的に裏切られている。精神医学では、偉大な先達の影響を受けつつも、健全な批判精神を維持しながら必要な課題に取り組んでいく必要がある。あらゆる年代の読者、そして、とくに若い世代が、精神科医に勇気を与えてくれる本書に触発され、著者のように自らの臨床体験を契機とし、精神医学を豊かなものに発展させてくれることを願う。

(兼子幸一)